「カクテル・パーティ」（T・S・エリオット）

エドワード・チェイムバレンはロンドンに住む法律家で、妻のラヴィーニアと結婚して五年になるが、今、夫婦は破婚の危機に瀕(ひん)してゐた。「おたがひに自分の罪を相手になすりつけあひ」、「おたがひを理解せずにすましてきた」生活が限界に達しつつあつたのである。

エドワードの「罪」とは人を「愛する能力」の缺如(けつじよ)である。彼は己れを「情熱的な愛し手」と思ひたがつてゐたが、實は妻を愛してゐなかつたばかりか、妻に隠れて愛し合つてゐた筈の若い娘シーリアをも愛してゐなかつた事を知つて、己れが「いまだかつて誰も愛したことがないといふ事實を認めざるをえなくな」り、「虚榮(きよえい)心をひどく傷つけ」られ孤獨感に苛(さいな)まれる。一方、ラヴィーニアは夫の目を盗み青年ピーターを愛人にしてゐたが、ピーターがシーリアに眞劍(しんけん)に惚れ込んだのを知つて嫉妬にかられ、「世のなかにだれも自分を愛してくれるものなんてゐないだらうといふ觀念にとりつかれ」、これまた孤獨感に苛まれる。詰り二人は「自分の

ことを愛する能力なしとおもひこんでゐる男と、自分はいかなる男にも愛されないだらうとおもひこんでゐる女と」の、「同じ孤獨」に苦しむ「似たもの夫婦」だつたのであり、福田恆存が書いてゐる通り、「人間存在といふものを洗ひたててみれば、われわれはことごとくエドワードとラヴィーニアなの」だが、問題は、さういふ二人に救ひの道はあるのか、である。

この作品の狂言回しで、作者の代辯者でもある精神科醫ライリーは二人に云ふ、「おたがひに理解しあへぬことを知つてゐる二人の人間」といふ自覺の上に立つて、常識に卽して着實に自己を維持し、自他に寬容に、過剩を期待せず、「自分たちが理解できず、また自分たちを理解できぬ子供を育てていく」といふ、爐邊の幸福の「よき生活」に滿足して生きるがいい、「この世の狂氣と暴力と愚劣と貪欲のうちにあつては」、それもまた生きるに價する人生だからだ。

然るに、シーリアにはそれは「一種の敗北」、「馴れ合ひ」としか思へない。彼女はエドワードから愛されてゐなかつたといふ事實を知つても、人間が「愛することのできないものと愛されないものとの寄りあひ」でしかなく「人間はみんなひとりぼつち」だといふ現實に甘んじたがらず、「强い精神的な愛の昂揚」、「歡喜に滿ちた恍惚境」の裡に生きるといふ「最善の生活」の夢を「忘れたくない」とライリーに語り、それを何處迄も追ひ求めて、キリスト敎團所屬の

看護婦として蠻地に赴き、やがて異教徒の叛亂軍の襲撃に遭ひ、惡疫に苦しむ瀕死の土人を最後迄逃げずに看護した擧句、十字架に架けられて殺される。

シーリアの慘死を知つてチェイムバレン夫妻は衝撃を受け自責の念に驅られるが、ライリーは窘めて云ふ、シーリアは「自己の肉體が單なる事物に轉落してしまふことを拒否」して死んだのであり、「これを幸福なる死といはずして、いかなる死が幸福でありえませうか」。要するに、人間存在の宿命的現實に對する精神の勝利をシーリアの死は象徴してをり、「最善の生活」の夢に殉じたその生涯は紛れもなく「幸福」であつたといふのである。だが、或時、ライリーはまたかうも云ふ、「よき生活」も「最善の生活」も「どつちがどつちよりいゝといふやうなものぢやない」、「兩方とも必要なのだ」。「最善の生活」を選び取る者は固より、「馴れ合ひ」の疚しさを自覺しつつ「よき生活」を選ぶ者も詰りは共に道德的存在、卽ち人間として生きてゐる。その「兩方とも」省みぬ者達を「人非人」と云ふのである。（福田恆存譯、T・S・エリオット全集二、中央公論社）